

入山交渉

実行委員長 高橋 洵

6月のラワルピンディは猛暑で寒暖計の目盛は夜になってようやく40度をやや下まわる程度であった。目標のガッシャーブルムII峰の登山許可の取得と、あわせて登山ルート of 偵察を目的としてやって来た百瀬泰、船井総一と私の3人は先ず暑さと連続する下痢に参ってしまった。それでも政府当局の責任者であるアワン氏に3週間ねばって都合3回にわたり会見したが、「ガッシャーブルムII峰は外国隊を含め6隊の競願下にあり」、如何にしても登山許可の確約は引き出せなかった。さらにバルトロ氷河ルートを通っての偵察行も不可とのことで、ヒンドゥー・クシュ方面のトレッキングを許されたのみであった。

アワン氏はそれでも気の毒に思ったか、9月に入ってわざわざ在日パキスタン大使館を通じ、「ガッシャーブルムII峰並びに第二希望以下の山岳はいずれも登山許可できないが、代りの登山目標を至急再申請するように」と出状したのであったが、どうした手違いか我々がこれを入手したのは12月に入ってからであった。この時点からの再申請では翌春出発予定の我が隊のスケジュールからみると、大使館を通じての書類の往復では間に合いそうになく、我々は非常な苦境に陥ってしまった。代りの登山目標といっても限られた山岳で、それも必ず許可されるわけではなく、隊員の動揺は激しかった。我々としてはせめて日本人未踏の山が欲しかった。この困難を救ってくれたのが友人の在日パキスタン人ハミッド・ミール氏（絨毯輸入販売）である。同氏は我々の立場を深く理解すると共に、登山申請順に許可という原則からはずれた今回のパキスタン当局の措置に疑問を抱いて、大使館に事情問合せの後数回の国際電話を通じてアワン氏に直接かけ合ってくれた。その結果10日を経ずしてチョゴリサ南西峰の登山許可を取得できたのであった。ミール氏とは我々がラワルピンディ滞在中街頭で偶然知り合い、アワン氏との交渉にも一度立ち会ってもらったことから、以来懇親を深めたのである。同氏の知遇を得たのは全く我々の幸いでありその温かい配慮に深く感謝の意を表したい。

かくして第一難関の登山許可は取得できたが、チョゴリサ南西峰については文献資料が皆無の状態です文字通り未知への挑戦となった。

アワン氏は人格的にも優れた役人であるが、招かれた同氏の家でふと漏らした「多くの日本登山クラブが許可取得に押しかけてきたが、遠征が終ると挨拶もない」との不満には岳人として、また日本人として大いに反省を迫られる事実だと思う。

終りに皆さんにぜひお勧めしたいのが、北京よりタクラ・マカン砂漠上空を経てカラコルム-ヒンドゥー・クシュ山脈を越える飛行コースである。中近東、ヨーロッパ及びアフリカの諸都市へも、もちろんこのコースを取ることができる。これも地球の一部かと一驚し感激する大景観が眼下に静々として厳々として広がっている。

追記：百瀬、船井の両名はチトラール、マストゥージ、ギルギットコースのトレッキングを満喫して帰国した。